

本文章已註冊DOI數位物件識別碼

▶ 台湾の大学における日本語専攻の学生と教員とのコミュニケーション活動

doi:10.29714/TKJJ.200106.0020

淡江日本論叢, (10), 2001

作者/Author： 滝澤武

頁數/Page： 407-418

出版日期/Publication Date：2001/06

引用本篇文獻時，請提供DOI資訊，並透過DOI永久網址取得最正確的書目資訊。

To cite this Article, please include the DOI name in your reference data.

請使用本篇文獻DOI永久網址進行連結:

To link to this Article:

<http://dx.doi.org/10.29714/TKJJ.200106.0020>



DOI Enhanced

DOI是數位物件識別碼（Digital Object Identifier, DOI）的簡稱，是這篇文章在網路上的唯一識別碼，用於永久連結及引用該篇文章。

若想得知更多DOI使用資訊，

請參考 <http://doi.airiti.com>

For more information,

Please see: <http://doi.airiti.com>

請往下捲動至下一頁，開始閱讀本篇文獻

PLEASE SCROLL DOWN FOR ARTICLE



台湾の大学における日本語専攻の学生と

教員とのコミュニケーション活動

淡江大学日文系助理教授

滝澤 武

【論文要旨】

本研究は、台湾の大学において日本語を専攻する大学生が授業外において教員とどのようにコミュニケーションを交わしているか調査することを目的としたものである。本研究では、台北県にある私立大学で日本語を専攻している大学生345名に対してアンケート調査を実施した。

その結果、学生は比較的年齢の若い、会話クラス担当の教員ともっとも頻繁に会話を交わす傾向があることが分かった。また、学年が上がるにつれて日本人教員と頻繁にコミュニケーションを交わす学生が増えてゆくが、4年生になるとその割合が低下するという結果が示された。同様に、学生が教員と会話を交わす際に日本語を使用する比率も学年が上がるに従って増加するが、4年生になるとその割合が低下するという結果となった。

さらに、学生と教員との会話の頻度とその会話の内容との間には有意な関連性が認められた。また、学生が教員と会話を交わす場所は、授業前後の教室や廊下がもっとも多いことが明らかになった。

キーワード：大学教育 日本語教育 コミュニケーション

0. はじめに

大学教育における学生と教員とのコミュニケーション、あるいは日本語学習者の学習動機に関するこれまでの研究は、教室内的における授業形態と学生の学習に対する動機付けとの関連性に注目したものが中心であった（三矢，1999；倉八，1992；Nussbaum，1992）。しかし、大学生にとっては、教員との授業外におけるコミュニケーションが、大学における学生の学習および研究活動に対する動機付けに大きな影響を及ぼす一要因であることがこれまでの研究でも明らかになっている（Takizawa，1998；Fusani，1994）。

本研究は、台湾の大学において日本語を専攻する大学生と教員との教室外でのコミュニケーション活動について調査を行なおうとするものである。授業外における学生と教員とのコミュニケーションのあり方を調査し、大学生の日本語学習に対するより効果的な環境の整備を進めてゆくことで、学生に日本語学習に対する積極的な動機付けを与え、さらには、大学生生活全般に対する総合的な満足度を上昇させることが可能になるものと考えられる。

1. 調査方法

1. 1 調査項目

本調査は、以下の3つの項目をもとに調査・分析を進めてゆく。

調査項目1 学生は主として、どのような教員（担当科目）と授業外においてコミュニケーションを交わしているのか。

調査項目2 学生は主として、授業以外のどのような場面あるいは手段で教員とコミュニケーションを交わしているのか。

調査項目3 学生は主として、授業外において教員とどのような内容のコミュニケーションを交わしているのか。

1. 2 調査対象

本調査では、台湾の台北県にある私立大学（在籍学生数約27000名）で日本語を専攻する大学生に対して調査を行った。調査に参加した大学生は男性69名（20.0%）、女性276名（80.0%）の計345名である。また、調査に参加した学生の在籍学年

の内訳は、1年生95名(27.5%)、2年生90名(26.1%)、3年生71名(20.6%)、4年生89名(25.8%)である。尚、今回の調査に参加した学生の平均年齢は21.0歳(標準偏差9.94)であった。

1. 3 アンケート

本研究では、調査対象の大学生に、授業外における教員とのコミュニケーション活動に関する中国語で書かれたアンケートに答えてもらった。回答に際しては、参加者の在籍学年、性別、および年齢を記入した後、自分が普段もっとも頻繁にコミュニケーションを交わしている教員およびその教員とのコミュニケーション活動について回答してもらった。

1. 4 分析方法

アンケートに対する回答は、コンピュータに入力した後、平均、標準偏差等の基礎統計量を計算するとともに、カイ二乗検定を用いて分析した。全ての検定には有意水準5%および1%を採用した。

2. 調査結果

2. 1 調査項目1に関する分析

調査項目1は、学生が主としてどのような教員(性別、担当科目)と、授業外においてコミュニケーションを交わしているのかという点に関するものである。

アンケートに対する学生からの回答を集計した結果、もっとも頻繁にコミュニケーションを交わす教員が、男性教員と答えた学生は194名(56.2%)、女性教員と答えた学生は151名(43.8%)であった。この比率は、調査を行った大学の日本語学科在籍専任教員の男女比率とほぼ同じ割合であることから、学生が頻繁にコミュニケーションを交わす教員とその教員の性別との間には有意な関係は存在しないと考えられる。

参加者がもっとも頻繁にコミュニケーションを交わす教員の年齢に関して、参加者に推定して回答してもらった。その結果、回答平均は39.2歳(標準偏差7.25)であった。尚、回答の内訳は表1の通りである。

表1 学生が主としてコミュニケーションを交わす教員の年齢

教員の年齢	回答数	回答比率 (%)
30歳以下	50	14.5
31歳～40歳	218	63.2
41歳～50歳	62	18.0
51歳～60歳	10	2.9
61歳以上	5	1.4

これらの結果から、学生が主として授業外でコミュニケーションを交わすと回答した教員のうち、80%近くが40歳以下の教員であることが明らかになった。尚、30歳以下の教員には授業を担当する教育助手（TA）も含まれるものと考えられる。

また、自分がもっとも頻繁にコミュニケーションを交わす教員の担当科目を尋ねたところ、学生は、会話クラスを担当する教員ともっとも頻繁にコミュニケーションを交わす（47.8%）傾向にあることが分かった（表2参照）。

表2 学生が主としてコミュニケーションを交わす教員の担当クラス

担当クラス	回答数	回答比率 (%)
日本語会話	165	47.8
その他	75	21.7
語学関係	66	19.1
作文・応用文	31	9.0
文化・社会	3	0.9
講読（新聞）	2	0.6
卒業論文	1	0.3
翻訳、通訳	1	0.3
文学	1	0.3

表中の「その他」には、現在は当該教員の授業を履修していない場合や、当該教員の担当科目が日本語学科の開講科目ではない場合も含まれている。しかし、文学あるいは社会文化といった科目に比べると、会話あるいは語学関係の授業は必修であるために、履修している学生数が多く、学生がそれらの担当教員と接触する機会も多いという点にも留意する必要があると思われる。

さらに、学生がもっとも頻繁にコミュニケーションを交わす教員は、日本人教員であるという回答が94 (27.2%)、台湾人教員であるという回答は251 (72.8%)という結果となった。調査を行った大学の日本学科専任教員のうち、日本人教員の割合は18.2%に過ぎず、日本人教員ともっとも頻繁にコミュニケーションを交わすという回答の27.2%は、日本人教員の在籍比率よりかなり高い値を示している。これは、学生が意図的に日本人教員とコミュニケーションを交わそうとしているという事実を示すものであると言えよう。

さらに、学生がもっとも頻繁にコミュニケーションを交わす教員の国籍（日本人あるいは台湾人）と学生の在籍学年との間には有意な関連性が確認された ($\chi^2 = 47.96, p < .001$)。もっとも頻繁にコミュニケーションを交わす教員が日本人であると回答した学生の割合は、1年生で11.6%、2年生で16.7%、3年生で56.3%と上昇してゆくが、4年生になると31.5%と減少するという結果となっている。

2.2 調査項目2に関する分析

調査項目2は、学生は主として、授業以外のどのような場面あるいは手段で教員とコミュニケーションを交わしているのかという点に関するものである。

まず、授業外における教員とのコミュニケーションの頻度については、(1) 頻繁に会話を交わす、(2) ときどき会話を交わす、(3) あまり会話を交わさない、(4) ほとんど会話を交わさない、という4つの分類からもっとも当てはまるもの一つを選択してもらった。調査参加者の回答結果は表3の通りである。

これらの回答のうち、「あまり会話を交わさない」と「ほとんど会話を交わさない」を合わせると、全体の56.2%と半数を超えることから、授業以外において積極的に教員とコミュニケーションを図ろうとはしていない学生が多いという結果が明らかになった。特に、「ほとんど会話を交わさない」と回答した学生が、全体の18.6%を占めているという点には注目すべきであろう。

授業外において教員とコミュニケーションを交わす頻度と学生の在籍学年との間には有意な関係は認められなかった ($X^2 = 10.9$, $p = ns$)。これは、教員との授業外におけるコミュニケーションの頻度は、学年とは関連性がないことを意味している。つまり、1年生に比べて、4年生は教員と頻繁にコミュニケーションを交わしているというような傾向が存在しないことを示すものである。

表3 授業外における教員とのコミュニケーションの頻度

コミュニケーションの頻度	回答数	回答比率 (%)
頻繁に会話を交わす	32	9.3
ときどき会話を交わす	119	34.5
あまり会話を交わさない	130	37.7
ほとんど会話を交わさない	64	18.6

教員と授業外においてコミュニケーションを交わす場合、主としてどの言語を使うかという質問に対しては、「日本語」と回答した学生が97名 (28.1%)、「中国語」と回答した学生が251名 (72.8%)、「台湾語」という回答が2名 (0.6%)、「その他」が2名 (0.6%) という結果であった。さらに、これにもっとも頻繁にコミュニケーションを交わす教員の国籍 (日本あるいは台湾) を合わせてみると、図4のようになる。日本語教員と頻繁に会話を交わすと答えた学生全体の79.8%は日本語を使ってコミュニケーションを交わしていると回答している (表4参照)。一方、台湾人教員と頻繁に会話を交わすと回答した学生のうちで、日本語を使って会話を交わすと回答した学生は、8.8%にとどまっている。

表4 教員の国籍と使用言語

		使用言語			
		日本語	中国語	台湾語	その他
教員	日本人	75 (21.7%)	19 (5.5%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
	台湾人	22 (6.4%)	225 (65.2%)	2 (0.6%)	2 (0.6%)

また、教員と会話を交わす際に使用する言語と学生の在籍学年との間には有意な関連性 ($\chi^2 = 56.3$, $p < .001$) が認められた (表5参照)。

学生が教員と授業外においてコミュニケーションを交わす際に、日本語を使用する比率は、1年生、2年生、3年生と学年が上がるにつれて上昇してゆくが、4年生になると、その割合は低下する。逆に、教員とのコミュニケーションにほとんどの学生の母語である中国語を使用する割合は、1年生から3年生にかけて減少し、やはり、4年生になると上昇する。また、各学年間の日本語および中国語の使用率を見ると、2年生と3年生の間に大きな差があることが分かる (表5参照)。

表5 教員との会話での使用言語と学生の在籍学年

		在籍学年			
		1年	2年	3年	4年
言語	日本語	14 (14.7%)	23 (25.6%)	42 (59.2%)	18 (20.2%)
	中国語	80 (84.2%)	66 (73.3%)	27 (38.0%)	71 (79.8%)
	台湾語	0 (0.0%)	0 (0.0%)	2 (2.8%)	0 (0.0%)
	その他	1 (1.1%)	1 (1.1%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
学年毎の合計		95 (100%)	90 (100%)	71 (100%)	89 (100%)

2.3 調査項目3に関する分析

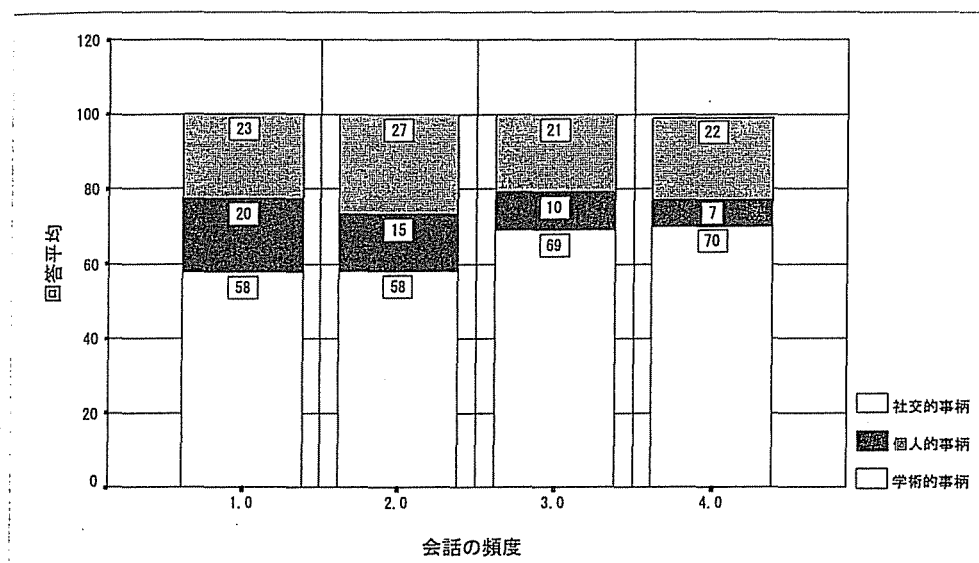
調査項目3は、学生は主として、授業外において教員とどのような内容のコミュニケーションを交わしているのかというものである。

授業外における教員とのコミュニケーションの内容に関して、全体を100%とした場合に、(1)学術的な事柄(授業あるいは宿題などについて)、(2)個人的な事柄、(3)社交的な会話、の3つの話題に対して、それぞれどのくらいの割合で会話をしているかを参加者に質問した。その結果、回答平均は、(1)学術的な事柄64.5%(標準偏差=27.8)、(2)個人的な事柄12.1%(標準偏差=13.5)、(3)社交的な会話23.3%(標準偏差=21.3)となり、学生と教員との教室外におけるコミュニケーションは学術的な事柄が中心であることが分かった。

また、学術的な事柄および個人的な事柄に関する会話を交わす割合と教員とのコミュニケーションの頻度との間には関連性が認められた(図1参照)。

学術的な事柄 ($X^2 = 17.8, p < .001$)、個人的な事柄 ($X^2 = 31.3, p < .001$)、社交的な事柄 ($X^2 = 11.3, p < .01$) のそれぞれの内容と学生と教員とのコミュニケーションの頻度との間には有意な関連性が認められた。図1を見ると、両者の会話の頻度が高くなるにつれて、個人的な事柄に関する会話の割合が増加する傾向にあることが分かる。また、学術的な事柄に関しては、会話の頻度が(1)頻繁に会話を交わす、および(2)ときどき会話を交わすのグループと、(3)あまり会話を交わさないおよび(4)ほとんど会話を交わさないのグループの間にはその割合に大きな違いがあることが分かった(図1参照)。つまり、授業外において教員とコミュニケーションを交わす割合が低いグループは、会話の内容が学術的な事柄に偏る傾向にあることが、この結果から読み取れる。

図1 会話の内容とコミュニケーションの頻度



注：会話の頻度1＝頻繁に会話を交わす、頻度4＝ほとんど会話を交わさない

2. 3 調査項目3に関する分析

学生は主として、教員とどのような場所あるいは手段でコミュニケーションを交わすのかという問題に関しては、「授業前後の教室あるいは廊下」という回答が全体の81.7%を占めた(表6参照)。

表6 授業外での教員とのコミュニケーションの場所（手段）

場所・手段	回答数	割合（％）
授業前後の教室や廊下	288	81.7
教員の研究室	20	5.8
校内（教室・事務室以外）	15	4.3
その他	12	3.5
校外（喫茶店など）	10	2.9
学科事務室	5	1.4
E-mail	1	0.3
電話	0	0.0

また、授業以外での教員とのコミュニケーションの場所としてもっと多くの学生が挙げた「授業前後の教室や廊下」および「教員の研究室」と学生の在籍学年との間には一定の関連性があることが分かった（表7参照）。これは、学年が進むにつれて、教員とのコミュニケーションの場所が、授業前後の教室や廊下に限定されず、様々な機会に広がってゆくことを示唆するものと言えよう。また、教員の研究室におけるコミュニケーションの割合は、1年生から3年生まではほぼ横ばいであるが、4年生になると急に上昇している。これは、調査を実施した大学の日本語学科では卒業論文が必修科目となっており、4年生になると、卒業論文の相談をするために教員の研修室を訪ねる機会が多くなることがその一因として考えられる。

表7 教員とのコミュニケーションの場所（手段）と学生の在籍学年

	1年	2年	3年	4年
授業前後の教室や廊下	88 (92.6%)	79 (87.8%)	58 (81.7%)	57 (64.0%)
教員の研究室	1 (1.1%)	0 (0.0%)	3 (4.2%)	16 (18.0%)

3. 結論

今回の調査では、授業外における学生と教員とのコミュニケーションには一定のパターンが存在することが明らかになった。学生は、一般的に、年齢の比較的若い（40歳以下）、会話クラス担当の教員ともっとも頻繁にコミュニケーションを交わす傾向にあることが分かった。これは、比較的幅広い話題を取上げ、学生とのコミュニケーションを中心として展開される会話クラスの特徴に起因するものであると思われる。教員は授業内においても学生とコミュニケーションを図ることに重点を置いており、学生と教員との間で比較的良好な関係を構築しやすく、それによって、授業外における両者のコミュニケーションも促進されるものと考えられる。今後は、実際のコミュニケーションの場面における言語運用能力を向上させる練習の一環としての授業外コミュニケーションの重要性を更に認識し、台湾人教員であっても、時には学生との間で、日本語によるコミュニケーションを心がけることが重要であろう。

また、教員と学生とのコミュニケーションの内容に関しては、全学年を通して、学術的な内容に偏る傾向が見られた。しかし、幅広い日本語会話能力の育成とともに、学生の精神的成長の促進という観点からも、学術的な話題に限定せず、幅広く個人的あるいは社会的話題に関する会話を積極的に交わしてゆくことが必要であると思われる。

教員と学生とのコミュニケーションを積極的に促進してゆくためには、教室あるいは廊下といった限られた場所あるいは時間を越えて、様々な場面においてコミュニケーションの機会を提供してゆくべきであろう。その一環として、専任教員はオフィス・アワーをより効果的に、そして積極的に利用して、多くの学生とのコミュニケーションを図る努力が

必要であると思われる。

学生と教員との授業外における緊密なコミュニケーションは、日本能力の習得といった認知的側面に限らず、学生の大学生活全般にわたる満足度を向上させ、より積極的な学習態度を形成するという観点から、その重要性を再認識して、これをさらに促進してゆく必要があると言えよう。

参考文献

- 倉八順子 (1998) 「プロジェクトワークが学習者の学習意欲及び学習者の意識・態度に及ぼす効果(1) —一般化のための探索的調査—」『日本語教育』80号, pp. 49-61 日本語教育学会
- 三矢真由美 (1999) 「能動的な教室活動は学習動機を高めるか」『日本語教育』103号, pp. 1-10 日本語教育学会
- Fusani, D. S. (1994). "Extra-class" communication: Frequency, immediacy, self-disclosure, and satisfaction in student-faculty interaction outside the classroom. *Journal of Applied Communication Research*, 22, 232-255.
- Nussbaum, J. F. (1992). Effective teacher behaviors. *Communication Education*, 41, 167-180.
- Takizawa, T. (1998). Extra-class communication between graduate students and faculty advisors in higher education. Unpublished doctoral dissertation, University of South Dakota, Vermillion, SD.